

茂吉の考古学

—ガリ版歌集『遠遊〈非賣品〉』を追う—

わが心やうやく和み雪つもる獨逸のくにを南へくだる 茂吉

『遠遊』冒頭

酒 井 龍 一

はじめに

斎藤茂吉が、欧州留学中「大正11～13年」の出来事を日記風に詠んだ歌集『遠遊』・『遍歴』を、読者は通例、「大正11～13年」（41～43歳）に詠んだと思う。茂吉「壮年」の作とみる。茂吉の息子 斎藤宗吉＝北杜夫（『壮年茂吉「つゆじも」～「ともしび」時代』1993年 岩波書店）も、斎藤茂吉記念館も同様である。同歌集の出版は「昭和22年・23年」（66～67歳）。従って、留学と出版の間に約25年の隔たりがある。本稿では、灼熱の夏が去った秋の一夜、茂吉の歌集・日記・書簡等を垣間見つつ、『遠遊』出版の経緯を追う。

茂吉歌集

茂吉歌集（第1図）は、通例、第1『赤光』（大正2・10・14・昭和24年）・第2『あらたま』（大正10年）・第3『つゆじも』（昭和21年）・第4『遠遊』（昭和22年）・第5『遍歴』（昭和23年）・第6『ともしび』（昭和25年）・第7『たかはら』（昭和25年）・第8『連山』（昭和25年）・第9『石泉』（昭和26年）・第10『白桃』（昭和17年）・第11『暁紅』（昭和15年）・第12『寒雲』（昭和15年）・第13『のほり路』（昭和18年）・第14『霜』（昭和26年）・第15『小園』（昭和24年）・第16『白き山』（昭和24年）・第17歌集『つきかげ』（昭和29発行）の17冊（斎藤茂吉記念館）。全歌集を写真に収録する場合でも、歌集番号と配列順序は同一である（例えば、『新潮日本文学アルバム』1985年 新潮社）。

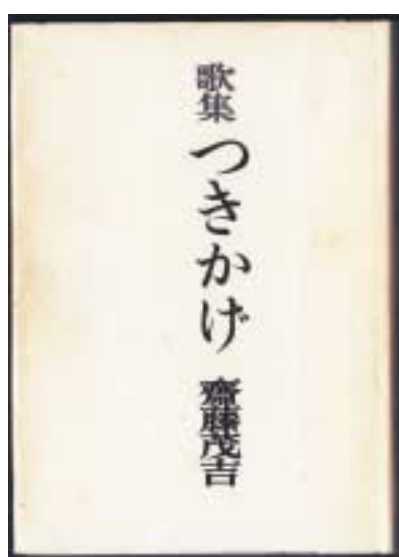
だが一見して、歌集番号と発行順序とは異なる。第4歌集『遠遊』は昭和22年発行だが、昭和15年発行『寒雲』は第12集である。歌集番号と発行順序が妥当なのは、有名な第1歌集『赤光』（明治38年）と第2歌集『あらたま』（大正10年）、最後の第17歌集『つきかげ』（昭和29年）ぐらいで、他は無秩序とも言える。何かの事情・思惑が潜んでいる。

余談をする。上記17冊の他に、例えば歌集『浅流』（昭和21年発行 八雲書店）が存在する。表紙には『歌集 浅流 斎藤茂吉』、「奥付」にも「著者 斎藤茂吉」。更に、茂吉の日記にも次の記載がある。それでも通例、『浅流』が茂吉歌集（17冊）から除外される。

【昭和二十年十一月十三日】○整理シタ原稿ヲ小林秀雄氏ニオクリ、又八雲書店ノ「浅流」モオクツタ、・・・。

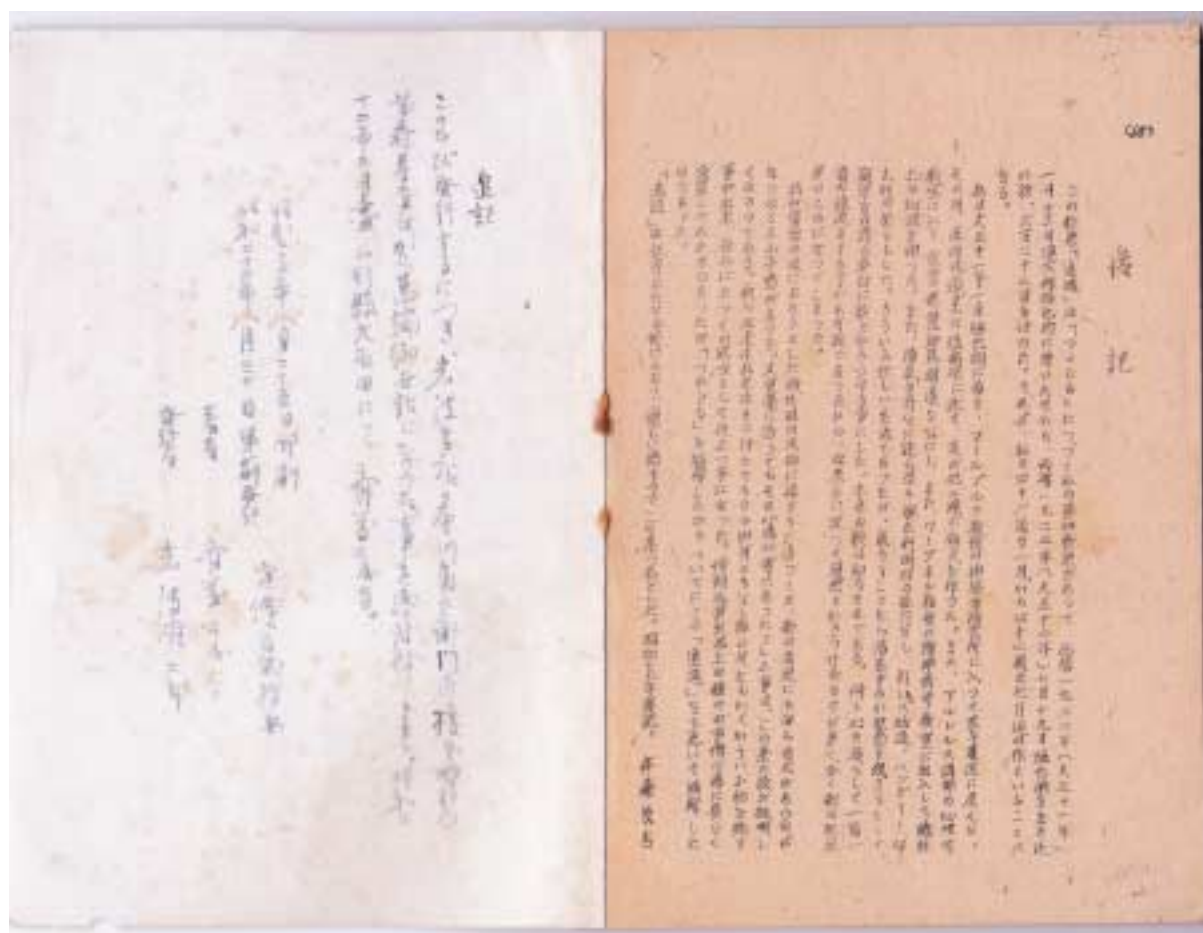


第1図 斎藤茂吉歌集17冊 + 『浅流』





第2図 ガリ版歌集『遠遊』



【昭和二十一年一月十三日】○「浅流」ノ校正ヲシタ、
（『浅流』発行は同年四月二十日。前後の三月十二日～六月十一日の日記は存在せず）

茂吉歌集であっても「茂吉歌集」でない理由は、実は「後記」に記されている。師を慕う弟子の率直な気持ちだが、読者の涙を大いにそそる。例え歌集でも、「日記」や「後記」まで読む必要のあることを教えてくれる。

斎藤先生が目下地方に轉居しておられ、萬時が御不便なので、伊藤禱一氏と私とでお歌をあつめました。歌集の名「浅流」はセンリユウと讀みます。先生の居られる國の、鳥海山も藏王山も月山ももう眞白になつたさうであります。明けて昭和二十一年に先生は六十五歳になりますが、ますます御丈夫で御いでになられむことを希つてをります。昭和二十年十一月、佐藤佐太郎。『浅流』「後記」

『遠遊』二種

周知の『歌集 遠遊 斎藤茂吉』（昭和22年 8月30日発行 岩波書店 270頁）に加え、別に『斎藤茂吉著 歌集 遠遊（非賣品）』が存在する（第1図・2図）。

12.4×17.7cm。68頁。ガリ版刷。粗雑な紙ゆえ小冊子の様相を呈す。注目すべきは、裏表紙内側に、茂吉自身が青ペンで「追記」・「奥付」を記している点。つまり、印刷時には「追記」と発行年月日・発行者・発行所・価格を記す「奥付」はなく、印刷後に必要があり、手間をかけて追加したものである。

両方とも、収録歌は同じ「623首」。両者の収録歌と長い詞書きの対比はしていないが、現時点では同一とみている。印刷・装幀・紙質などの差異は別に、次の点が指摘できる。

活字本は、[アララギ叢書第百廿三篇]が付され、オウベルシュタイネル先生の写真が載り、「目次」に「後記」の項目はない（「後記」自体は267～269頁に印刷）。

ガリ版本は、「非賣品」と明記され、叢書番号を見ず、先生の写真がなく、「目次」に「後記」の項目を含む。「追記」に微妙な差もある。「事⇄こと」、「致します⇄いたします」、「大石田にて 斎藤茂吉⇄大石田にて 斎藤茂吉。」などである。ガリ版本がどの程度に流布したかは不明。「追記」・「奥付」が茂吉の手書きなので、そう多くはないだろう。

「後記」・「追記」

次に、ガリ版本の「後記」・「追記」・「奥付」を示す。以下、本稿では、網掛・太字は筆者、歌・日記・書簡など本来の縦書きを横書きで掲載、文字・改行など一部改変、年齢・年数は概数である。

この歌集「遠遊」は「つゆじも」につづく私の第四歌集であって、西暦一九二二年（大正十一年）一月十三日奥大利維也納に着いた日から、西暦一九二三年（大正十二年）七月十九日維也納を去る迄の歌、六百二十三首を収めた。されば、私の四十一歳の一月から四十二歳の七月迄の作といふことになる。

・・・。

「遠遊」は杜甫あたりの詩にもあり、懐かしい語なのでこの集の名とした。

昭和十五年夏記。斎藤茂吉

(「後記」ガリ版)

このたび発行するにつき、岩波書店の布川角左衛門氏、榎本順行氏、藤森善貢氏から萬端御世話になった事を感謝致します。昭和二十二年三月盡、山形縣大石田にて。斎藤茂吉。(「追記」ペン書き)

昭和二十二年八月二十五日印刷

昭和二十二年八月三十日第一刷発行 定價百貳拾圓

著者 斎藤茂吉

発行者 岩波雄次郎

(「奥付」ペン書き)

「後記」の「私の四十一歳の一月から四十二歳の七月迄の作といふことになる」は、明快な茂吉にしては、奥歯にモノの挟まった表現である。また「昭和十五年夏記」と明記するが、昭和15年夏の日記には「昭和十五年八月十四日 ○ウインノ帳面ヒラヒヨム。感慨深シ。」と記すだけで、実際は、ウインの作歌はまだしていなかった。

先行研究

茂吉研究者は偉い。既に、茂吉研究者で歌人の安森敏隆氏（京都女子大学教授）は、第4歌集『遠遊』（昭和22年）と第5歌集『遍歴』（昭和23年）に関し、下記のように、的確に問題点を把握した上で、明快な研究結果を発表されている（「斎藤茂吉に於ける〈日常〉性の位相－『遠遊』・『遍歴』を中心として－」『日本文学研究13』1977年 梅光女子大学日本文学会）。同論文により『遠遊』の経緯に関する大枠を把握できる。ただし、ガリ版歌集『遠遊〈非賣品〉』の存在には触れられてない。

【問題点】

『遠遊』『遍歴』はわかりやすい歌集である。と同時に誠に複雑な歌集でもある。そのわかりやすさは茂吉自身「後記」でいっているように「歌日記程度」のものにすぎないという内容のわかりやすさからくるものであり、その複雑さは成立事情の一点にかかっているといっていよい。

【結論】

以上のように実証してきて得た茂吉像は、昭和十六年のひと夏をつかって、実は箱根強羅^{ラボラトリー}の工 房にこもり、大正十一年一月～大正十四年一月におよぶ自分の過去の日記をみながら、せっせと歌になりそうな箇所^{ラボラトリー}に傍線を引き、一日平均四十前後の歌をつくっている老獪な茂吉の像である。

ポイントは三点。

【A】茂吉は、大正11～13年（41～43歳）に書いたウイン・ミュンヘン留学中の日記を見ながら、【註：ウイン滞在は大正11年1月～12年7月（41～42歳）】

【B】昭和16年7月～8月（60歳）に、箱根強羅の別荘に籠って歌をつくり、

【C】同22年8月30日（66歳）に、『遠遊』を出版した（『遍歴』は翌23年）。

経緯は、【A】体験・素材：大正11年～12年（41～42歳）→【B】作歌：昭和十六年（60歳）→【C】出版：同22年（66歳）。この大きな時差を知った上で、『遠遊』歌を、「茂吉壮年の歌」とみるか、「茂吉晩年の歌」とみるかは、読者の判断に委ねられる。

歌の完成から『遠遊』出版までの経緯は、「昭和16年7月～同22年8月」間にある。ガリ版歌集『遠遊』もその間に作製されたに相違ない。以下、茂吉の日記・書簡（封書・葉書）他を垣間見ていく。事は昭和15年から始まる。

昭和15年：感慨

【昭和十五年八月十四日】○ウインノ帳面ヒラヒヨム。感慨深シ。【日記】

ウイン滞在（大正11年1月13日～12年7月19日（41～42歳）から約17年が経過した昭和15年（59歳）。同年3月、第12歌集『寒雲』（昭和15年3月1日 古今書院）を出版。5月14日、『柿本人麿』で「帝国学士院賞」を受賞。6月、第11歌集『暁紅』（昭和15年6月30日 岩波書店）を出版。同年7月22日、茂吉は箱根の別荘に入った。

上記のように、昭和15年夏は過去を垣間見ただけで展開はなかった。そして、9月13日午後1時に別荘を離れ、東京の自宅に戻った。

10月1日、茂吉は、『寒雲』を「学士会月報」で批評・紹介した池田茂登に礼状を出す。池田に敬意を表した勝山勝司の葉書（勝山勝司→池田茂登）と共に紹介しておく（第3図）。ちなみに、これら葉書2枚は新資料＝「未登録」である。

勝山氏は、昭和15年6月11日に、茂吉と夕食を共にした人物。その日の茂吉日記を見ておく。「帝国学士院賞」受賞（5月14日）直後なので、受賞や歌集『寒雲』を話題に、宴会は大いに盛り上がったことであろう。池田茂登氏については本稿最後に紹介する。

【昭和十五年六月十一日】○夕方ヨリ勝山勝司、古今書院、山口、佐藤君ト、築地さやまニテ夕食ス。

昭和16年：作歌・名称「遠遊」

翌昭和16年7月2日。昨年同様、箱根の別荘に滞在。ウインの日記を見ながら、今度は作歌に専念（60歳）した。留学中と帰港中の歌を完成・清書した奇しくも翌日、8月15日、斎藤宗吉（後の北杜夫：別荘では炊事軍曹として活躍）が来着。茂吉は宗吉と8月29日まで生活を共にする。宗吉は、茂吉からウイン作歌の話を聞いたか否か？

茂吉は9月12日まで滞在し、東京に帰って清書をする。時あたかも「太平洋戦争開始」（同年12月8日）直

前である。

- 【昭和十六年七月三日】○ウイン日録ノゾキ見ル、
- 【七月四・五日】（関係事項なし）
- 【七月六日】○夜ニナツテ維也納ミユンヘンあたりの帳面ノ順序ヲ見タリシタ。
- 【七月七～十日】（関係事項なし）
- 【七月十一日】○維也納到着ヨリノ帳面ノ未完成歌ヲ整理シハジム。二三首。
- 【七月十二日】・・・。維也納帳面ツゞキ。・・・、○・・・。維也納ノ帳面ヲ見テ、タトナツタ。
- 【七月十三日】・・・。維也納ノ歌當ナク拾ツテ少シ整理シタ。
- 【七月十四日】○維也納ノ帳面ヲバハジメテ順ヲ追ウテ整理ジハジム。（二）ヨリハジメ、後（一）ニ歸ラントス。夏休暇マデ大體整理ス。
- 【七月十五日】（ドナウ・ブダベストの歌整理など）
- 【七月十六日】（ミユンヘン～ライン河の歌整理など）
- 【七月十七日】○ドイツヲ去ツテ維也納ニ歸ツタ
- 【七月十八日】○維也納日記、大正十一年秋ヨリ、・・・○大正十一年度夕方ニ整理ス、甚ダ粗雑ナルベシ
○夕食後、大正十二年ノ維也納ニカゝル。
- 【七月十九日】○・・・。帳面維也納大正十二年度。ソノ一部（伊太利旅行、バドガスタイン旅行）ヲ除イテ大體スンダ。
- 【七月二十日】（伊太利の歌の整理など）
- 【七月二十一日】（ナポリ・ミラノの歌の整理など）
- 【七月二十二日】○・・・、朝食後、バドガスタインニ移リ、今日デ維也納滞在中ノ歌ノ整理ガ大體出來タ。意外ニ歌數多ク。粗末ナ歌バカリダガ兎ニ角愉快デアル。
- 【七月二十三日】○夕方、・・・、維也納滞在中ノ歌大體ノ整理ヲ了ヘタ。
- 【七月二十四～二十八日】（ミユンヘンノ歌など）
- 【七月二十九日】（関係事項なし）
- 【七月三十日～八月二日】（ミユンヘン・独逸旅行・巴里・倫敦の歌など整理）
- 【八月三日～四日】（関係事項なし）
- 【八月五日】（ミラノ・ヴェネチアなど）
- 【八月六日】○歐羅巴滞在中一トホリ眼ヲトホス、十一月廿八日日マルセユヨリ出帆ト云フコトニナツタ。
- 【八月七日】○航海中ヲ一見ス。
- 【八月八日】○・・・、タゞ歸航中ノ手帳ガ見ツカリ便利デアツタ、
- 【八月九日】○歸航歌夜マデニテ終ル。○コレニテ大體洋行中ノ歌ノ整理粗末ナレドモ終了シタコトナル。
○維也納ノミ、（三百三十首、旅ヌキ）、・・・
- 【八月十日】○整理セル歌ヲバー讀スルコトトシ、夜寝ルマデ粗雑ナルガ大體終了セルガ如シ。
（以下省略：茂吉は9月12日まで箱根に滞在、同日、東京に帰った）
- 【九月十八日】○維也納歌稿少シク清書シタ。

●同日、茂吉の日記にない関連事項が存在する。側近 佐藤佐太郎の日記から補記しておく。その三日前に茂吉は露伴を訪問している。

【昭和十六年九月十八日 木曜】。夜、歌をもってお宅へ行くと、山口茂吉氏が座にあった。先生は「西洋の歌も〈留学〉というのは大橋（松平氏）の（幼学）と似ているしするから、露伴先生につけてもらって〈遠遊〉とした。いろいろ本をみてくれたりしたが、杜甫にあるんだね。〈西遊〉というのもしかたといっていたが」と言われ、・・・。

●ちなみに、茂吉の「手記四十九」（昭和十五～十八年分）には杜甫の抜粋「慈顔望遠遊・・・（略）・・・齋慰遠遊」を記入している。

【十二月八日】○昨日、日曜ヨリ帝國米英二國ニタイシテ戦闘ヲ開始シタ。
老生ノ紅血躍動！

【以上、日記】

茂吉の日記を読み始めると、「日録」・「帳面」・「日記」・「整理セル歌」・「手帳」・「筆記」・「増補」・「推敲」・「清書」・「原稿」・「校正」など、出版以前に、実に様々な形態の考古資料が存在することがわかってくる。ただし本稿は深入りせず、あくまで「垣間見る」程度に留まる。

昭和17～18年：沈黙

次の2年間は沈黙。「遠遊」に関する記述はない。

【昭和十七年】第10歌集『白桃』出版（2月25日発行 岩波書店）

【昭和十八年】第13歌集『のぼり路』出版（11月20日発行 岩波書店）

昭和19年：清書不明・発見・目次

箱根での作歌から3年。清書不明事件が発生。すぐ解決し、これを契機に「目次」が作製される。「一杯飲ンデワカレタ」。実に率直な喜びようである。

【昭和十九年三月二十四日】○「遠遊」ト云フウイン詠草ノ清書不明ニテ氣ヲイラダタシメタ。・・・。「遠遊」ヲ少シク再見ス。・・・

○佐藤君來リ「遠遊」「遍歴上」ノ筆記ヲ持参、コレニテ萬事解決。目次ノ作製ヲ依頼、一杯飲ンデワカレタ、

○「遠遊」ノ訂正ヲ筆記ニ書キ入レタ。

【六月三十日】○遠遊、遍歴ノ歌ヲ辛ウジテ抄シタ。

【七月二十日】○「遠遊」漫抄。

【以上、日記】

上の日記から、茂吉が保持する「遠遊」の「清書」と、佐藤の持参した「筆記」の存在がわかる。「遠遊ノ訂正ヲ筆記ニ書キ入レル」は、佐藤持参の「筆記」に訂正を書き入れたことを示す。「遠遊」の歌を、茂吉だけでなく、佐藤ももっていたことは注目される。

昭和20年：疎開・終戦

【昭和二十年四月十日】疎開のため東京を立ち、郷里^{かなめ}金瓶の齋藤十右衛門方に居住

【八月十五日】御聖勅御放送（太平洋戦争敗戦）

昭和21年：転居・編集者来訪・「遠遊」を読む・整理（印刷用）・出版依頼・製本原稿・
原稿送付・購入依頼・「後記」送付・「追記」予告

金瓶から大石田に転居。あの歌集『浅流』を出版。岩波書店の榎本順行が、はるばる東京から来訪する。用件は不明。直後、8月19日と20日、「遠遊」を持って愛宕神社に行く。では、茂吉が読んだのは、茂吉の「清書」か、佐藤の「筆記」か、より進行した別のものか。いずれにしても、印刷・出版すべく「整理」をした。「整理」とは？ 9月23日、岩波書店 布川角左衛門宛に「遠遊」・「遍歴」の出版依頼の書簡を出す。先の榎本来訪は、印刷・出版の事前準備か。

注目すべき点は、書簡の「原稿はすでに出来て製本してあります」の記述。印刷するのに原稿を出す必要はない、と茂吉は言い切る。10月15日、布川宛に、「遠遊」「遍歴」の原稿を近々送る旨の書簡を出す。

【昭和二十一年一月三十日】金瓶を去り、二月一日から山形県大石田 二藤部兵衛門宅に住む。

【四月二十日】歌集『浅流』を出版

【八月十六日】○・・・榎本順行君（岩波書店）十一時頃来ル、共ニ午食ヲシ、板垣君ガ一寸最上川ヲ案内シテ、午後四時ノ汽車ニテカヘル、

【八月十九日】○午後、愛宕神社ニ行キ、「遠遊」ヲ讀ミ、半分バカリ讀ンダ

【八月二十日】○午前中愛宕神社（・・・）遠遊ノ後半ヲ讀ンダ

【八月二十七日】○ソレカラ遠遊ヲ印刷出来ルヤウニ整理した、【以上、日記】

【八月三十日】歌集『つゆじも』を出版

【九月二十三日】岩波書店 布川角左衛門宛【書簡】

・・・。「つゆじも」についてあと五冊ほど、既に出てゐます遠遊（ウイン在住時代）遍歴（ミュンヘン、パリ、等）は歌日記程度のものですが、明年中に二冊出していたゞけませうか、**原稿はすでに出来て製本してありますが、それをほどいてその儘御用ゐ下さつてよろしいのです（筆寫下さるには及びません）**右御ついでにの節、御急ぎになりませんから、御意見御もらし願ひ上げます。この二冊は、留學生の歌日記で、あまり賣れないやうな氣もいたします皆々様によろしく御願ひいたします。

【十月十五日】岩波書店 布川角左衛門宛【書簡】

○「遠遊」「遍歴」もその**原稿**近々書留小包にて御送申上げますから、よろしく御取計らひ御ねがひいたします。

【十月三十一日】山本成雄様【書簡】

○「つゆじも」くはしく御読みなされこれも感謝します、この次は洋行中のもの二冊あります。皆岩波から出るとおもひますから出ましたら一本御求めねがひあげます

【十一月十四日】岩波書店 布川角左衛門宛【書簡】

○遠遊の「後記」はあれて全部にて、「後記増補」は無い見込です。あつても五六行の挨拶だけと存じます。

10月31日の書簡では、「遠遊」と「遍歴」の出版を確信。出版に向けて順調に進行していた。11月14日、「後記」の原稿を送り、「後記増補」の可能性も示唆している。

昭和22年：校正・叢書番号・口絵・コロタイプ・送付先・部数・装幀・検印・
発行・『遠遊』一冊入手・分配先・二十部入手・感謝・校正

翌22年3月30日、「遠遊」の校正を返送。アララギ叢書の番号を確認。「口絵」の指示をする。装幀に満足。検印を岩波に委ねる。「遠遊」出版の際、送付先に関しても具体的に依頼。昭和22年9月9日、ついに出版本『遠遊』一冊が届いた。続いて9月某日、『遠遊』二十部が届き、大満足と感謝の気持ちを率直に伝えている。

【昭和二十二年三月三十日】○廣野三郎ノ歌集草稿ト予ノ歌集遠遊ノ校正トラ返送シ、手紙ハガキ等ヲ送ツ
タ

【日記】

【四月十七日】アララギ 五味保義様【書簡】

○拙歌集「遠遊」のアララギ叢書の番號きまりましたか（前号にて御願せり）きまりましたら、一寸御しらせ願ひ上げます、

【四月十八日】佐藤佐太郎様【書簡】

○「遠遊」に口繪一枚たのみました。コロタイプにしたいのですが、「つゆじも」のやうな悪い印刷なら、やめたいと思つてゐます。コロタイプ出来なければアミ版の上等にしたいのですが、一つ榎本君に當つてくれませんか、この口繪は珍品なので大切に取扱ひたく、一度、その印刷の見本を見たいのですどうぞこのことも榎本君、矢口君と御相談下さいませんか、「遠遊」の装幀も必ずしも白と合せでなくともいいのですが、毛ばだつのは困ります、何とかして丈夫な感じのもので御願いたします、

【四月二十六日】土屋文明大人【書簡】

○小生歌集、アララギ叢書番號 遠路（「遊」の誤記）一二三號岩波 遍歴一二四號岩波 右の件、御承諾たまはりたく御願申上げます

【五月三日】岩波書店內 榎本順行様【書簡】

○遠遊のアララギ叢書番號一二三篇遍歴クク一四篇○遠遊の口繪、オウベルシュタイネル先生遍歴クク

シュピールマイエル先生（近々御送りします）二つとも珍品にて、普通見られないものですから印刷、（少々金がかかっても）上等にしたい考ですからどうぞ、御無理でも御骨折下さいませんか、このことは布川さまにもまげて御願してください。

○遠遊のオウベルシュタイネル先生像はコロタイプにして下さるさうで、感謝にたへません、どうぞ上等のにして下さい（一度見本見せてくださいませんか）

○「遠遊」御出来の節は、山形縣北村山郡大石田町二藤部方、斎藤茂吉宛二十五冊東京都世田谷區代田一ノ四〇〇斎藤茂太宛二十冊松本市縣町北區中野太郎江方斎藤宗吉宛八冊寄贈分約五十冊

○装幀等は御手紙のにて満足いたします、

○検印は御任せいたします（岩波印にて結構です）

【五月三日】藤森朋夫様【書簡】

○、只今岩波から「遠遊」といふ哥集進行中ですが、或は寄贈出来ないかも（生活費が不足のため）しれませんが、一冊御購求願ひ上げます。松本高校の次男【註：斎藤宗吉、後の北杜夫】にも學費不足を歎ぜしめるありさまにて、少々ヘコタレてをります、

【昭和二十二年八月二十五日印刷】

【昭和二十二年八月三十日第一刷発行】【以上、『遠遊』「奥付」】

【昭和二十二年九月九日】○「遠遊」一冊トドク（岩波矢口進君）ソレヲ一讀シタトコロが【日記】

【九月二十二日】佐藤佐太郎様【書簡】

○遠遊の校正もありがたし

【九月二十七日】斎藤茂太殿【書簡】

○遠遊は少部数だから、茂太のところの十冊のうち百子のところ、宇田のところ位にしてみてもらひたい

【九月（日不詳）】榎本順行宛【書簡】

○遠遊二十部正に拝受、どうぞ矢口様によろしく御禮申上げて下されたし。○遠遊の賣行具合等御しらせ願ひ上げます○遠遊非常に立派にて何とも感謝いたします

結 論

以上が茂吉の歌集・日記・書簡等が語る『遠遊』出版の経緯である。わがガリ版歌集『遠遊』に関する記述があったのか、なかったのか？ 本稿では判断保留。ガリ版歌集の存在を提示するだけに留め、しかるべき「茂吉研究者」に委ねよう。

一夜の夢か。酷使した眼に星が散り始めた頃、窓が白けたように思えた。冷めた珈琲を飲みほし散歩に出るか。扉を開けると意外に暗黒の世界であった。田園を貫く散歩道のはるか前方左手には、若草山が蹲っているはずだ。やがて鮮やかな赤光が背後の山々の輪郭を描き始めた。ついに眩い太陽が頭を出した。太陽に

向かって散歩道は伸びている。この時、一句が浮かんだ。思えば、茂吉の声だったかもしれない。

人生に向かって伸びる散歩道 龍一

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり 茂吉

追 記

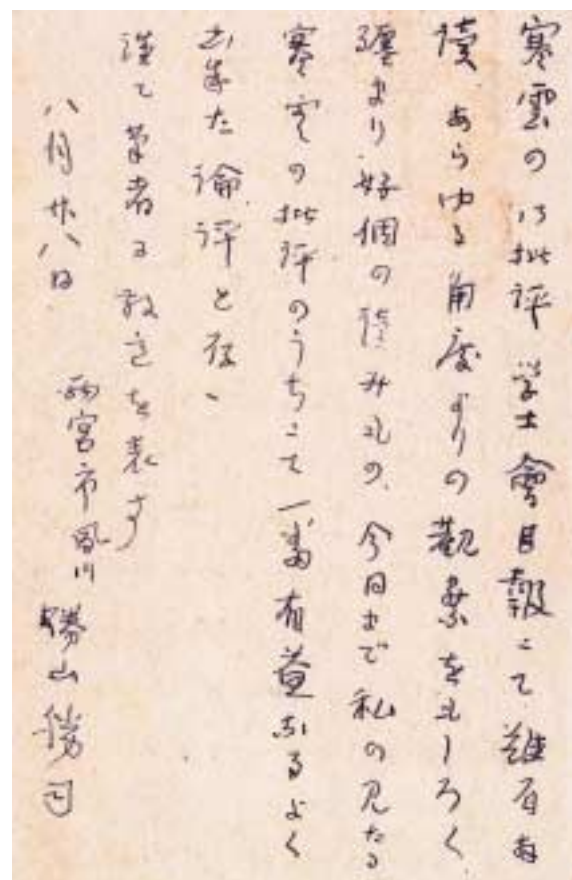
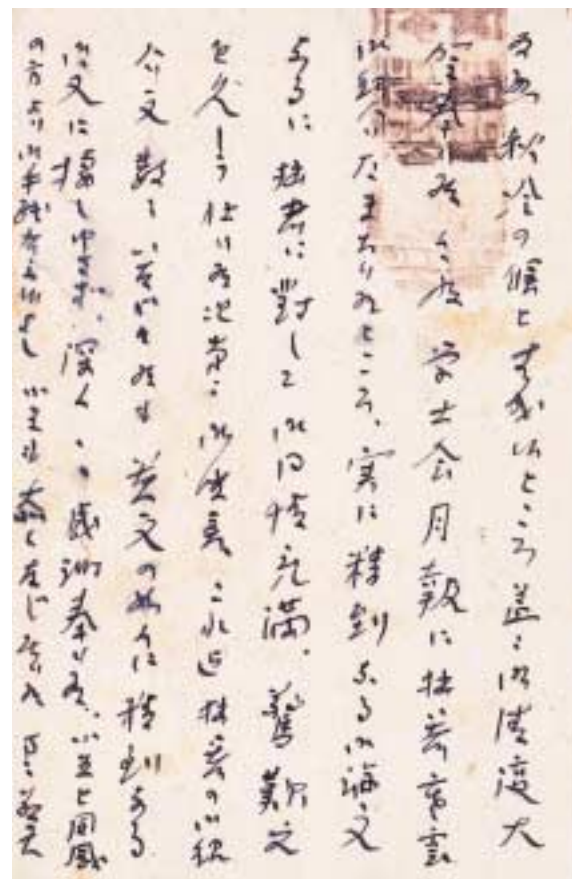
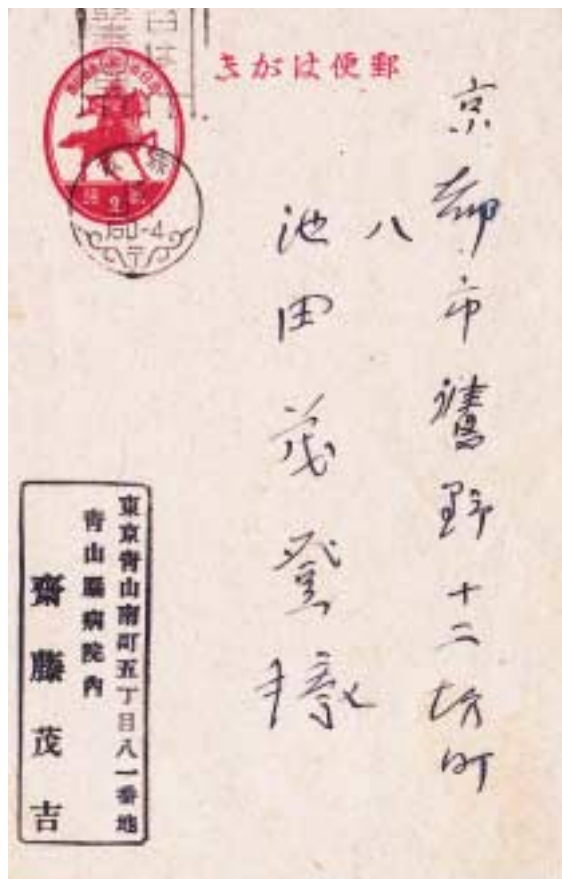
私が所蔵する茂吉歌集は、『暁紅』（68～69頁）に挟まっていた葉書（斎藤茂吉→池田茂登宛）等から、既に「池田茂登」旧蔵と判明している。茂登氏は「妻もなし、子もなし、係累もなし、金もなし、暇もなし、死にたくもなし」の「六無齋」。次の歌があるようだ（情報発信者未詳）。同氏に告ぐ。「心配御無用！」。あなたの旧蔵書は、このように「茂吉の考古学」に活用している。御礼。

我が歳九十を過ぎぬ然れどもわが行く道のかがやきとあり
我が庭を高くおほえる青空にはなやぎ咲ける合歡の紫 茂登

追記の追記

本稿校正中、残念ながら、茂吉の息子 宗吉（北杜夫）が死去。2011年10月24日、84歳であった。『遠遠』に限って言えば、昭和16年7～8月、茂吉は箱根別荘で欧羅巴留学時（大正11～14年）の日記を見つつ当時の作歌に励み、清書が終了したのは8月14日。勤勞奉仕で帰京した宗吉が箱根別荘に来着したのは、奇しくも翌15日。満足感が溢れていた父は、留学の思い出話を若き息子に大いに語ったことであろう。御冥福を祈る。

【昭和十六年八月十五日】○宗吉、夕方歸ル【別荘に到着の意味】、鰻モツテ來タ。



第3図 池田茂登への葉書